

令和 2 年 5 月 20 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K03043

研究課題名(和文)在宅ケアにみる家の記憶とエージェンシーに関する文化人類学的研究

研究課題名(英文)The Anthropological research for memory of home and agency in home care

研究代表者

福井 栄二郎 (FUKUI, EIJIRO)

島根大学・学術研究院人文社会科学系・准教授

研究者番号：10533284

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、高齢者へ「家とモノの記憶」に関する聞き取り調査を行い、そこから在宅ケアにとって不可欠な「家のエージェンシー」を明らかにするものである。

期間中、具体的には、スウェーデン、デンマーク、ヴァヌアツ、日本で調査を行い、高齢者たちにインタビューを行った。高齢者からは家と家財の記憶を聞いた。またケアワーカーからは、いかに家の記憶を保持することがよいケアに関連しているのかを伺った。

こうした成果は順次、発表を行い、これまで論文を6本、図書を3冊執筆し、学会発表も5本行った(今後、論文1本、図書2冊が刊行予定)。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では国内外の高齢者に家や家財の記憶についてインタビューを行い、また理論的には「家的な場所」の意義を彫琢したが、それには次のような背景がある。

今後、日本の高齢者ケアは施設から在宅へ移行する。私がこれまで調査してきた北欧諸国の場合、グループホームなどには長らく愛用した家具や調度品を自宅から持ち込むことができ、家的な雰囲気がある。愛用品に囲まれることで、高齢者たちは、安心して暮らすことができるのである。

そう考えると、「施設」でも「自宅」でもない「家的な場所」を志向した空間が、今後の日本でも求められるのであり、本研究は今後の在宅ケアのあり方に一石を投じるものでもある。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to explore “agency of home,” which is essential for home care, through interviewing older people about their memories of home and things.

During my research, I conducted research and interviewed with elderly people in Sweden, Denmark, Vanuatu and Japan. I've heard from the elderly about their memories of home. We also heard from care workers how retention of memories is associated with good care.

These results have been published in succession, and so far I have written six papers and three books. I have also made five conference presentations (One article and two books will be published in the future).

研究分野：文化人類学

キーワード：ケア 高齢者 ヴァヌアツ スウェーデン エージェンシー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、近年のわが国の「在宅ケア」に対する意識の高まりがある。日本の終末期の現状を述べるなら、現在、85%の人が病院、診療所、老人ホーム等の「施設」で最期を迎えている。だが他方で、厚生労働省の諮問機関である「終末期医療のあり方に関する懇談会」が2010年に行った調査によれば、自分の余命がほとんどないと判明した場合、70%以上の人が在宅でのケアを望んでいるという結果が出た。こうした背景に鑑みると、今後、ケア現場の最前線は「施設」を離れ「在宅」へと移行することは間違いない。

この点を踏まえ、現在、厚生労働省が主体となり「医療と介護の垣根をなくし、在宅において協働するケア」を推進、展開しようとしている。だがそこでの問題群は決して政策の領域だけで閉じられるべきものではない。機能的な在宅ケアシステムの構築は、医学、社会福祉学、看護学、そして文化人類学等のアカデミズムにとっても焦眉の急となる。

私がこれまで調査してきた北欧諸国の場合、グループホームが多く存在し、機能的に整備されている。そこは「施設」でも「自宅」でもない。だがこれまで長らく愛用した家具や調度品、写真などを自宅から持ち込むことができ、家的な雰囲気がある。その環境のなかで高齢者たちは、寄り添い、安心して暮らすことができるのである。そう考えると、「施設」でも「自宅」でもない「家的な場所」を志向した空間が、今後の日本でも求められることになるのである。

2. 研究の目的

上述の背景をもとに、本研究では、高齢者へ「家とモノの記憶」に関する聞き取り調査を行い、そこから在宅ケアにとって不可欠な「家のエージェンシー」を明らかにすることを目的とする。

この問題関心を文化人類学でいうと、B. ラトゥールや A. ジェルらが展開してきた、エージェンシーの議論との親和性が高い。彼らの議論の要諦は、「モノが人間に働きかける」という点から、主体(人間)/客体(モノ)の関係性を再考するところにある。日本の人類学においても、こうしたモノがアクターとなりネットワークを構築するという脱人間主義的な研究の必要性が謳われている。また近年では「存在論的転回」として、より広範な展開をみせてもいる。こうした動向も踏まえて本研究は遂行されなくてはならない。

より具体的にいうと、「家やモノ」がエージェントとなり、高齢者に安らぎや居場所を与えているのではないかというのが本研究の仮説である。本研究は3地域のインタビューから、この点を明らかにし、「家やモノのエージェンシー」をより深いレベルで考察する。

だが私のこれまでの研究で明らかになったのは、人々は「家やモノ」そのものに「居場所」を感じているのではない。ある人にとって「家族写真」はある種の感情を喚起させるが、別の人にとっては、それはただの紙切れに過ぎない。だからエージェントとして機能しているのは、「家やモノ」そのものではなく、「家やモノの記憶」だといえる。では「記憶」は人間(主体)なのかモノ(客体)なのか。ラトゥールらの議論では、こうした問題は論じられることがなかった。裏を返せば、彼らの議論には、はじめから「人」か「モノ」しか存在しなかったのである。

主体性を人間だけに限定せず、モノにまでそのエージェンシーを拡大する意義はたしかに存在する。だが人間の生活のなかには、「人」と「モノ」だけでなく、「記憶」「感情」「人格」など、そのどちらとも判別つかないものが多数存在している。ジェルらの議論を展開、刷新するには、こうした曖昧な存在まで含め批判的に検討する必要がある。

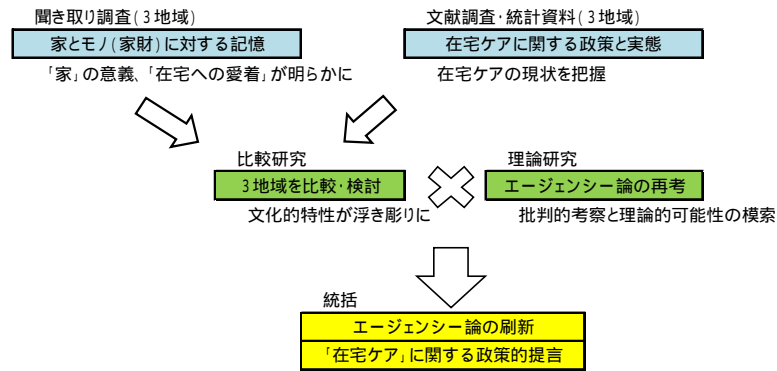
3. 研究の方法

本研究では、日本、北欧(スウェーデン、デンマーク)、ヴァヌアツという3地域の高齢者を対象にインタビュー調査を行った。

質問項目は多岐にわたるが、主に以下の点について重点的に質問した。家の記憶、ライフヒストリー、家財の記憶、家族とのつながり、これからの人生。

また高齢者本人ではなくケアワーカーにも質問する機会があった。その際には、いかにこれまでの記憶が「適切なケア」に結びついているのかについて質問した。

こうして収集したデータを用いつつ、先にあげた先行研究の理論と接合しながら、「家のエージェンシー」についての新たな理論を構築した(下図参照)。



4. 研究成果

研究成果は順次、刊行・発表を行い公表した。研究期間中に論文を6本、図書を3冊執筆し、学会発表も5本行い、今後、論文1本、図書2冊が刊行予定である。

本研究の成果には、次のような意義がある。まず看護学や社会福祉学で論じられてきたこれまでの「在宅ケア」論には、「家は高齢者にとって安心できる居場所」という暗黙の前提が横たわっていた。だが、なぜ家が「居場所」なのか。北欧に多く見られる「自宅」でも「施設」でもない「家的な場所」はどうなのか。こうした家の意義を根本から問う問題は、これまで等閑に付されてきた。本研究では、「家やモノの記憶」に焦点を当てることで、家への愛着やその意義が明らかになる。

そして高齢者問題やケアという問題群を扱っているので、近隣諸分野との連携することで、今後もさらなる展開が可能となる。加えて私の居住・勤務する中山間地域の場合、増加する高齢者の問題は、逼迫した社会問題である。最新の研究成果を学生に伝えることも可能であり、より地域社会に還元できる研究だといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 福井 栄二郎	4. 巻 11
2. 論文標題 社会的排除と親密圏 地域で暮らす刑余者の事例から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 山陰研究	6. 最初と最後の頁 57-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 福井 栄二郎	4. 巻 83-2
2. 論文標題 書評 伊地知紀子著『消されたマッコリ。 朝鮮・家醸酒文化を今に受け継ぐ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 299-302
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 福井 栄二郎	4. 巻 7-1
2. 論文標題 地域文化観光から考えるローカルな主体とアクターネットワーク論 橋本和也著『地域文化観光論 新たな観光学への展望』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 観光学評論	6. 最初と最後の頁 67-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 福井 栄二郎	4. 巻 14
2. 論文標題 Possibilities of Comparative Studies: A Critique of the Ontological Turn	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会文化論集	6. 最初と最後の頁 25-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福井 栄二郎	4. 巻 12
2. 論文標題 書評：寺尾紗穂著『南洋と私』	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 社会文化論集	6. 最初と最後の頁 79-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 FUKUI Eijiro	4. 巻 35
2. 論文標題 From Kastom to Developing Livelihood: Cruise Tourism and Social Change in Aneityum, Southern Vanuatu	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 People and Culture in Oceania	6. 最初と最後の頁 85-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 福井 栄二郎
2. 発表標題 家の記憶とエージェンシー
3. 学会等名 まるはち人類学研究会 (招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 福井 栄二郎
2. 発表標題 高齢者の包摂と見えない異化
3. 学会等名 科研「社会的なものの再編とリスクの統治」研究会 (招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 福井 栄二郎
2. 発表標題 現代社会における公共的なもの コメントとして
3. 学会等名 日本文化人類学会中四国研究懇談会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 福井栄二郎
2. 発表標題 家のような空間から
3. 学会等名 科研「北欧の在宅・地域ケアに繋がる生活世界アプローチの思想的基盤の解明」第11回研究会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 福井 栄二郎
2. 発表標題 地域の高齢者を考える
3. 学会等名 疾病予防予知プロジェクトセンター研究会
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 浜渦辰二、石黒 暢、斉藤弥生、福井栄二郎、竹之内裕文、備酒 伸彦、齊藤 美恵、是永 かな子、山本 大誠、カーリン・ダールベリ、川崎 唯史、中河 豊、高山 佳子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 298
3. 書名 北欧ケアの思想的基盤を掘り起こす	

1. 著者名 福井 栄二郎ほか	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 307
3. 書名 交錯と共生の人類学 オセアニアにおけるマイノリティと主流社会	

1. 著者名 福井栄二郎他	4. 発行年 2016年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 387
3. 書名 多配列思考の人類学 差異と類似を読み解く	

〔産業財産権〕

〔その他〕

島根大学文化人類学研究室 http://www.ipc.shimane-u.ac.jp/anthro/fukui.html

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考